

日だけときめられており、国民みんながそれを守っている。

このように国全体が観光に気を使っており、自分達だけが生活してゆければ何でもよい、他人は一切おかまいなしというのではなく、他人が外から眺めても気分が良いように配慮して、国全体が調和と統一の美をなしている。さすがは生活の余裕と歴史の重みのあるヨーロッパだなと感心させられた。わが国でも、このようなヨーロッパの良い点はまねて、できるだけ花いっぱい生活をすよう、建物には高さの基準をきめるよう、そして紙くずを散らかさないようにするなどすれば、少しずつでも私達の生活にうるほいを持つことができ、暮し易くなるのではないだろうか。

## ゾウの道とコココーラ

門 村 浩

東アフリカのケニアでの地形調査のとき、たいへんお世話になったものの中に、ゾウの道とコココーラなどビン詰めの清涼飲料水がある。これら2つのものは、ある意味で東アフリカの現代における状況を象徴している。

1971年に再度ケニアを訪れた目的のひとつは、熱帯半乾燥地域における基盤岩の風化断面の特徴を調べ、その地形形成に果たす役割を検討することであった。このため、ハンマーを震源とする簡易地震探査を、ベディメントや基盤岩を切る平原の上で行なった。時期はちょうど乾季であったので、乾性サバンナやブッシュランドであれば草が枯れているので、どこへでも簡単に測線が展開できると考えていた。ところが、地図や空中写真上で選んだ現場に行ってみると、有刺性の背丈の低いブッシュが意外に密生しており、測線を思ったようには展開できない。トゲにさされながら適当な場所はないかと探しているうちに眼にとまったのが、ブッシュの中を縦横に走っているゾウの道である。中には、まだ真新しいフンのところがあるものもあり、ゾウが近くにいることが予想される場合もあったが、思いきって作業をすすめることにした。ゾウの道は、決して真直ぐではなかったが、それでも作業の能率を大いに上げさせてくれた。

ところで、東アフリカの国立公園では、前にも書いた(地理17巻5号)ように、ゾウの過集中に起因する植生の破壊に悩まされている。人間の活動範囲の拡大により、ゾウの主たる生息領域が国立公園のような狭い地域に限定されたためである。ツェボ国立公園では、空中写真でみると、ウォーター・ホールから無数のゾウの道が放射状につけられているところがある。これは、植生が破

壊され、裸地が拡大していつていることを示す。事実、バオバブをはじめ、木本類も急速に破壊されつつあるのである。熱帯半乾燥地域における人為の影響による自然生態系の破壊としてとらえなければならない現象である。

コココーラは、世界を制覇したといわれている。東アフリカにおいても、このことはあたっている。この地域で安心して飲める水は、ビン詰めのコカコーラである。まして、乾燥した地域では、唯一の飲める水である。人口のまばらな遊放民の生活する辺境であっても、車の通れる道路さえあれば、部落の店でナイロビから運んだ「文明の水」を売っている。この水には、ずい分お世話になった。しかし、これは高い水であり、現金収入のほとんどない遊放民には無縁の水に近い。また、かれらにとっては、車の通る道もそれほどありがたいものではない。モウモウと砂ボコリをあげて車が走ってくると、かれらはあわてて逃げる。家畜を追う場合には、道路をさけ、草原やブッシュの中を道路と平行に移動している。道端のアカシアの木かげで休んでいたラクダを追うボラン族の老人が、われわれの車を止め、"Notaka mazi Kidogo."（水を少し分けてくれ）といったことばは、ナイロビ — アディス・アベバ道路建設のキャンプのために掘削された深井戸に、もらい水のため集まる人々の姿とともに、たいへん印象的であった。

## 韓 国 雑 感

鈴木 秀 夫

いろいろ多くの国を見たが、今度の韓国旅行は、もっとも魅力のあるものだった。語りたいことはたくさんあるが、はじめて女子大学で講義をすることになった今、日頃感じていることを含めて小文を書いてみたい。

あらゆる学問は観察にはじまる。ところが、こともあろうに地理学では観察にもとづいていないことが多い。地球表面が研究対象であるのだから、その全体を観察するということは、一人の人間として事実上不可能ではあるが、旅行の機会を少しでも多くとらえることは大切なことである。

ところで旅行をすると、我々の感覚をとらえる事柄は実に多様だ。入国手続きをする時の表現しきれない異国感、言葉の違い、タクシーをつかまえる時、ホテル、食事。これらは、何の専門家であろうと、もっとも強く感覚をとらえられるものであるに違いない。ところが多くの専門家は、早く自分の専門へ関心を限定することを始める。地形学者は地形の違いに目をこらすようになる。国